

ネイチャー高知

No 51 2018年7月31日発行



自然しらべ 2018 身近なアリしらべ！

小さな体で勤勉に動きまわるアリたち。
私たちの身近場所にも、たくさんの種類のアリがくらしています。
見つかったアリの種類をしらべると、その場所の状態がわかります。
今の日本にはどんなアリたちがくらしているのか、
あなたの家の庭や近所の公園をしらべてみませんか。
きっといつも見ていた身近な風景が変わって見えます。

2018年の自然しらべの対象は「アリ」です。身近な昆虫ですが、じっくり観察された方は少ないのではないのでしょうか。今年の自然しらべをきっかけに、アリに挑戦してみてください。

私も試してみましたが、正直言って今までの自然調べのなかで一番難しそうです。マニュアルでは捕まえたアリを透明な袋に入れてルーペなどで観察し種名を調べることにしていますが、アリが動ける状態で観察することはなかなか難しいです。セロテープで上下から張り合わせて観察することをお勧めします。

また採集したアリが何という種かを調べるのも、似たような形態のものが多く、時間がかかります。

今までの自然調べでは物足りなく感じられていた方向けのマニアックな調査かもしれません。参加マニュアルはここに

https://www.nacsj.or.jp/official/wp-content/uploads/2018/06/shirabe2018arishirabe_manual.pdf

アリの画像データベースはここにあります。

<http://ant.miyakyo-u.ac.jp/J/index.html>

多くの方が挑戦されることを期待しています。

(坂本 彰)

わたしのフィールドノート 小さな庭の観察会

田城 光子

手入れの良くない我が家の小さな庭には、いろいろな蝶が飛んでくる。ジャコウアゲハ、ミカドアゲハ、モンキアゲハ、ツマグロヒョウモンなどなど。庭の入り口に生えているオオバウマノスズクサにはジャコウアゲハが産卵し、黒と白のパンダ模様の幼虫がうじゃうじゃしている。やがてクリーム色の蛹になり、トサシモツケやグミの木の枝にぶら下がる。枯れ葉がひっかかっているのかと思ったら、あちらにもこちらにも蛹がぶら下がっていた。成虫は透けた黒いレースのような、なかなか艶めかしい姿をしている。年に何度も繰り返し羽化する。いつか蝶の飛んでいくあとを追って行ったら、ウマノスズクサの生えている場所があちこちで見つかった。ジャコウアゲハに少し似て黒と赤でちょっと気持ちが悪く、速足で地面を這うのは、ツマグロヒョウモン。スミレの仲間を食草にする。庭に植えたスミレやアリアケスミレを食べつくす。丸坊主になったスミレたちの葉が再生する頃には、またツマグロヒョウモンがやってくる。食糧も尽き果てたと心配して、いつぞやは近くの農道の、スミレがたくさん生えているところに移住させたこともあったが、スミレもツマグロヒョウモンもたくましく生きていて、どちらかが負けてしまうことはまだない。玄関脇のフユザンショウにいるのは、緑色をしていてもっとグロテスクなアゲハチョウの幼虫だ。体が大きいので食欲旺盛、糞の量も多い。葉の色に同化しているので見つかりにくい、下のタイルに糞が転がっているのが気づく。枝先はいつも枯れたようになっていて、切ってしまうかと思ったら新しく葉がでてくるし実もなる。これも少々食べられたくらいではへこたれない。

幼虫の苦手なわたしだが、唯一可愛いと思うものがある。ミカドアゲハである。きれいな緑色でしっとりとした肌、頭でっかち尻すぼみの体型と、目玉とまちがえる黒い模様。昔友人にもらって植えた2株のオガタマノキが、ずいぶん大きくなった。4~5月にほとんどの葉を落としてしまい、すぐに新葉が展開する。そこにミカドアゲハが飛んでくる。以前は、あちこちの葉に食べられたあとが見られるようになると、近くの小学生がよく観察にやってきたのだが、今では関心を持つ先生がいなくなったのかゆとりが無くなったのか、訪れることもなくなり、さみしくなってしまった。このオガタマノキにはキジョランが絡まり長く伸びて、アサギマダラも産卵にきていた。丸い大きな葉の真ん中に、小さなやはり



丸い食べあとができていたが、うっかりして根元から切ってしまい、枯れてしまった。果実が割れ、振り乱した鬼女の白髪も、いかにも毒があるぞと言いたげな模様のアサギマダラの幼虫も、見ることができなくなったのは残念である。

鳥もやってくる。冬は、ヒヨドリ、スズメ、ジョウビタキ、シロハラ、メジロなどが常連さんだ。ヒレンジャク、キレンジャクもきたことがあるが、ピラカンサの木が大きくなりすぎて隣に迷惑がかかりはじめたので切ったら、まったく来なくなった。今は、家の屋根の下に巣があるらしく、スズメの一家、イソヒヨドリのつがいなどが



よく来る。芝生の中で拾った虫を口移しに食べさせているのをよく見る。はじめは親が雛に与えているのかと思っていたが、巣立った子に口移しでやることは無いだろう、親離れ子離れははっきりしている、これは求愛行動だろう、とある時気がついた。子離れがなかなかできなかった自分が、ちょっと恥ずかしかった。先日は、イソヒヨドリが大きなムカデをくわえていた。はたしてお相手に喜んでもらえただろうか。梅雨の晴れ間に突然弾丸のような速さで飛ぶものがあると思ったら、ツバメであった。生垣周辺で小さな蛾がたくさん発生し、ひらひらと飛び回っていたが、数羽のツバメが目にもとまらぬ早業で食べてしまったのかいなくなっていた。蛾がいなくなるのと、ツバメが庭から姿を消したのと、ほぼ同時、わずかな数分のできごとだった。

歳がいき、体調にも自信がなくなって、遠出することにだんだんと不安をおぼえるようになった。でも、自宅の窓越しに見える小さな世界にも、たくさんの生命の営みがあり、それをまぢかに見ることができる。植物や虫を観ていると、自分の生き方を考えなおすヒントがあったり、とても深いものを感じ感動することがある。ファーブルはたしか、自宅の敷地内だけで昆虫記を書いたと読んだ記憶がある。我が家の小さな庭にも、まだまだわたしの知らない世界と新しい発見がいっぱいあるような気がする。

(写真 2 ページ：アサギマダラの幼虫 3 ページ：ジョウビタキ)

山陰型タチツボスミレのすご技 ～タチツボスミレの仲間①～

細川 公子

今年の春先は異常に寒い日が続き、春の花はかなり遅れていました。ところがその後急に夏日の気温となり、スミレもあっという間に咲いて終わってしまいました。今年ほどスミレを観ていない年はありませんでした。高知ではタチツボスミレの仲間は、タチツボスミレ、ナガバナタチ



距の背面 (Y字型の距に花茎を挟み込んでいる)

ツボスミレ、ニオイタチツボスミレ、山陰型タチツボスミレが観られます。山陰型タチツボスミレは日本海側に多く、県内では分布が少なく、花期はタチツボスミレより早い。例年ではまだ先始めの4月3日佐川町の自生地に行ってみると、花はもう盛り



2011.4.5(佐川町)

が過ぎていました。



昨年、関東から植物観察に来られた方から距

の形態について教えられ、初めて気が付き観察すると「スゴッ！」全ての花の距は写真の通り。か弱い花茎を距が支え、訪花昆虫の重さにも耐えられるように完璧に計算された職人技に驚嘆です。花の色はごく薄い淡紅色、葉は基部が切型、葉の先端は尖らず、葉脈は目立たない、花後は特に匍匐することが多いことなどがタチツボスミレとの相違点



引用：いがりまさし「撮れたてドットコム」



距の側面 (蕾のとき花茎は距の横側なのに、開花に伴い距の中へ。距が膨らんでピタッと納まる) 2011.4.5

です。下の写真のものは「山陰型」として檮原町で撮影したものです。葉の形態は該当するのですが、花の色は淡青紫色、距はタチツボスミレと同じ形です。いがりさんの「日本のスミレ」でもこの特殊な距の記載は

ありません。ちなみに、徳島県側から登った石立山の中腹の「山陰型」はY字型の距をしていました。いずれにしても、とても面白く疑問がいっぱいなのです。



2011.5.7(檮原町)

来春、タチツボスミレ系で葉が「山陰型」のスミレを見つけたら、距に注目してみてください

い。山陰型タチツボスミレはまだ正式には位置づけられていません。遺伝子的にどう違うのかなど興味津々です。新しい自生地など情報をぜひお寄せ下さい。

野山での拾い物 モクズガニ

坂本 彰

今回対象となった拾い物はモクズガニ。拾ったというより採集したという方が正確である。

自宅の前を用水路が流れている。この用水路の起点は高知市の朝倉堰で、いまでも朝倉一帯の水田に水を供給している。用水路には、ところどころにゲートがあって、雨が降るときには用水路の水を川に落とし、排水路としての機能も果たすように管理がされている。雨が降りそうで降らなかった場合は、用水路は干された状態になり、時にはフナやドンコが水たまりで水が流れてくるのを待っている。



今朝の雨も通り雨に近い状態だったので水が少なく、何かいないか探しているとモクズガニがいた。見かけたのは4匹だが、そのうちの最も大きいものは、水路にあいている穴にすばやく潜り込んでしまい、捕まえることができたのは甲羅の幅が2.5 cm (メス)、3.5 cm (オス)、4 cm (メス)の小型のものばかりとなった。

モクズガニ(子供のころは単に「ズガニ」といっていた)については子供のころの思い出が多い。最も強く記憶に残っているのが大きなはさみで挟まれたことで、激しい痛みとともに指を切り取られるのではないかという恐怖さえわいてきた。また鰻のひご釣りの際、ミミズを刺したひごをウナギのいそうな岩の割れ目などに差し込むと強い引きがあり「かかった!!」と思って引くと鰻でなくてズガニだったこともよくあった。川の中で見かけたズガニは、魚などの死骸をよく食べていたので肉食かと思っていたが、そうではないらしい。胃の内容物を調べると枯死植物由来の有機物の碎片が胃を満たしており、主な食料としては植物に頼っているとのことである。そう言えば物部川を中心にモクズガニを採っているTさんは、採ったモクズガニを一時的に飼育している際に、カボチャの切り身を餌に与えていると言っていた。通常は藻などの植物を採餌しており、たまたまミミズや死んだ魚に出会うと、御馳走としてそれを食べているというのが実際の姿のようである。

はるか昔の話になってしまうが、子供のころは「ズガニを食べると肺ジストマになる」といわれていた。学校でもそのように教えられたと記憶しており、根拠のない話ではなかったと思う。それが最近では田舎のグルメとして結構人気があり、平気で素手で触ったりしており、ミンチにする際も特段気にしているようにも見えない。食料の乏しかったころ、川魚であればなんでも採っておかずの足しにしていたが、ズガニだけは食べなかったし採りもしなかった。いまさらながらではあるが、もったいないことをしたなと思う。



モクズガニの腹側 (左:メス 右:オス)

「鳴子」のある風景に思いを巡らせながら

松本 孝（自然観察指導員／中学高校吹奏楽部打楽器経験者）安芸市土居

私が所有の鳴子は高知市内の楽器店で購入したものです。虫送りを調べるとき専門家にうかがったり図書を調べたり、和楽器の太鼓の専門書を読んだりするときに鳴子も気になっていました。

鳴子は田んぼに吊るして稲に来る鳥を追い払う道具ということ、よさこい鳴子踊りで使うことは何となく程度で知っているくらいでした。昭和39年生まれの私は田んぼにあった鳴子がどういったものかは全く記憶にありません。

父に「田んぼにあった鳴子」と聞くとそこにあった広告チラシ裏面に記憶にある形を描き、そのシンプルな形より、家にある身近な材料（板、竹、縄）で、音が鳴るようにシンプルそのままに「鳴子もどき？」を作ってみました。

父より年上で長年農業をされてきた方と会う機会があり、この鳴子もどきを持ってその方に見せたところ「お～これこれ、こんなが」と話してくださりました。いろいろとうかがうことができ「ええもん、見させてもらうた」と言ってくださり、この鳴子もどきは鳴子でいいのかなと思いました。

児童向けの図書（「日本各地の伝統的な暮らし2 農村の伝統的な暮らし」）の秋の農村で秋にどんな仕事をするかを紹介した頁に、実った稲を守ると題して「鳥追い小屋」や「鳴子」のことが記されていて、「鳥追い小屋」は子どもたちが作業をしている様子の写真とそのイラストが掲載され（秋田県）、「鳴子」もイラストが掲載されていて参考になりました。

鳴子はよさこい鳴子踊りで使われ、そのいきさつを知りたく、よさこい鳴子踊りが始まった頃の資料がないか調べていたところ「よさこい祭50年」という本に出会い、そこで武政英策氏を知りました。

ご存知のように武政氏はよさこい鳴子踊りを作られた音楽家。大阪で活躍されていて、戦時中に奥様が育った南国市へ疎開し、戦後高知に住み県内をめぐり、各地域に残る歌を調べることをされた方です。

よさこい鳴子踊りで特徴なのは「鳴子」を使うこと。阿波踊りは素手で踊るので、高知は手に持った方がいいと、年にお米が二度とれる土佐では鳴子は圧巻と武政氏が鳴子を思いつかれます。

戦後、県内各地を巡っていたとき、田んぼに鳴子があってガラガラ鳴らしていたのをきくと見ているのではと想像します。

武政氏がよさこい鳴子踊りで使う道具、歌詞、メロディを数日間で仕上げたことに驚き、常に取り組んでいるからこそできたことを感じました。

踊りに鳴子を使った考えを知ることができ、偉大な先達の示した高知にふさわしい方向性がある



ればこそ今があり、高知の風土の中にある暮らしの道具を祭りに用いたことに深い敬意の思いで資料を見たことでした。

武政氏はそれまでの業績により高知県文化賞を昭和39年に受賞しています。私が生まれた年です。

昭和57年12月1日にお亡くなりになり、その業績の散逸を憂う関係する方の全面支援で、亡くなられた一年後の昭和58年12月1日に作品集「土佐ふるさとのうた」が発行されています。

私が鳴子を作ってからしばらくした後、歴史民俗の専門家より「土佐郷土童謡物語（昭和24年）」という本を教えてください、この本には植物や鳥、虫、土をはう物、魚、星、月、雨、風などの謡の他にも正月や年中行事、ねんねの子守などがあり、私は知らないことばかりでした。

この本の著者は桂井和雄氏（土佐民俗学会会長）。桂井氏が長年、村や町から集めた資料で、年とともに忘れられたりするものと記されています。

本に掲載の謡の言葉にどこかで見た記憶があり、今一度、武政氏の「土佐ふるさとのうた」を見ていると共通する文字に気づき、今までピンときませんでした。桂井氏と武政氏がつながりました。

桂井氏は「文字だけでは謡の響きはわかりません。口伝の謡を後々まで残すのは謡の文字だけでは完全ではなく、何年か後に立派な音楽家が出ていただき、郷土の方々の土地へ行って謡のメロディを譜にとることをしなければ、この童謡採集の仕事はまだ片手落ちである」とその本に記していました。

あらためて「土佐ふるさとのうた」と「土佐郷土童謡物語」をあわせて見ました。「土佐ふるさとのうた」の冒頭に桂井氏の文書があり「採譜（メロディを楽譜に書き取ること）をきちんとして土佐の子どもたちにいつまでも伝えてやれるような立派な音楽家に出てほしいと強烈に願い、その願いは武政氏によってかなえられた」とあり、「武政氏はこの出版物や話を参考に県内の山間奥地まで歩き採譜に打ち込まれた」とあります。「武政氏の出現が遅れたら消えた歌も多かったに違いない」ともありました。

後世に残すべく伝えようとした先人の足跡にふれるとき、ただただ深い敬服で、心が満たされる思いです。

高知で音楽に関わる方は、「土佐郷土童謡物語」「土佐ふるさとのうた」を一度は並行して見ていただきたい、郷土の先人たちの足跡を胸に後進の指導にあたっていただきたいと願わずにはられません。

私は中学高校と吹奏楽部でした。中学校のときの顧問の先生と卒業後も演奏会などでお会いします。

数年前、私がおの先生に武政氏のことをたずねるとその先生が若い頃、武政氏に作曲を習ったことを話してください、興味深くうかがったことでした。

暮らしの背景、その場所の地形や気候風土の背景を知ると、当たり前と思うことがそうではないことに気づき、その地域を知ることに深みができます。

身近な自然と私たちの暮らしのつながりを心して、私なりに探究していきたいと思います。

観察会のお知らせ

初秋の草原の植物観察会

初秋恒例の観察会です。秋というには少し早い時期ですが、植物の世界では夏から秋に衣替えをして、本格的な秋に備えています。一足早く季節の移り変わりを感じることができる観察会です。

日時 2018年9月1日(土曜日) 午前9時から12時(予定)

場所 高知市高見町皿ヶ峰 (9時に筆山第3駐車 皿ヶ峰登山口集合)

講師 稲垣典年(当会会長・牧野植物園)

参加費 無料

持ってくるもの 筆記用具 あれば図鑑

参加希望者は事前の申し込みをお願いします。

「ネイチャー高知」の原稿募集

「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。次号は2019年1月発行予定です。身近な観察記録など、どしどし投稿ください。

【編集後記】

例年よりも2週間も早い梅雨明けといきなりの酷暑、逆走台風とこの夏の気象はこれまでの経験が役に立たないことが多く、不気味ささえ感じます。

そんな中で、機関紙ネイチャー高知も執筆者のご協力により、無事に51号を発行できました。暑い中、執筆いただいた皆様に感謝申し上げます。

自然に親しむ機会の多い季節です。近所の子供さんを誘って、あるいはお孫さんの夏休みの宿題のお手伝いで、身近な自然に触れてください。外出の際には、熱中症にならないようくれぐれもご留意ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 51

事務局 780-8075

高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp